序章 伊勢神宮——変容の歴史——……………ジョン・ブリーン 3

I 古代

1 考古学からみた伊勢神宮の起源——ヤマト王権の伊勢支配——……………山中 章 19

2 伊勢に見え隠れする仏教 七六六～七八〇……………ヘルマン・オームス 37

3 『延喜式』制以前の伊勢神宮……………小倉慈司 55

——八～九世紀の内宮と外宮をめぐって——

II 中世

4 中世伊勢と仏教……………ウイリアム・M・ボデイフオード 77

5 夢告と観想——鎌倉時代における僧たちの伊勢参宮——……………伊藤 聡 92

6 地中の仏教——伊勢神宮の地下からの眺望——……………D・マックス・モーマン 108

7 混沌の始めを守る——度会行忠の混沌論と徳政——……………マーク・テーウエン 123

III 近世

8 復活か創造か——天正一三年の神宮式年遷宮をめぐって——……………西山 克 137

9	読み替えられた伊勢神宮——出口延佳、本居宣長を中心に——	斎藤英喜
10	御蔭参りににおけるお札降り現象——近世庶民の伊勢信仰の側面——	劉琳

IV 近代〜現代

11	伊勢における神仏分離……	河野訓
12	神苑会の活動と明治の宇治山田……	谷口裕信
13	修学旅行と伊勢……	高木博志
14	昭和四年式年遷宮と伊勢……	田浦雅徳
15	戦後の伊勢——プリント・メディアにみる神宮と式年遷宮——……	ジョン・ブリー
補論	浮遊する記号としての「伊勢」……	ファビオ・ランベッリ

——日本史における伊勢神宮の多重性と神道の絶えざる再コード化——

あとがき
索引
執筆者紹介

【凡例】

本書は専門の異なる研究者が参加する性格上、用語や読み方の統一が出来ない場合がある。それらについては各執筆者の原文を尊重する方針を採っている。

例…天照大神（あまてらすおおみかみ／てんしょうだいじん）、アマテラス

変容する聖地 伊勢

序章 伊勢神宮——変容の歴史——

ジョン・グリーン

伊勢神宮は、二一世紀の日本の最も重要な聖地だといえよう。平成二五年（二〇一三）の出来事を思い起こせば、そういう結論になる。この年は九〇〇万に近い数の人びとが伊勢神宮を訪れたといわれている。それは伊勢神宮が七世紀に創建されて以来最大の数である。周知のことだが、平成二五年は特別な年であった。二〇年に一度の式年遷宮がクライマックスを迎えたからである。

式年遷宮とは、定められた年（式年）に神様が社殿を遷ること（遷宮）だが、それに関わる一連の儀礼全体を式年遷宮という。「遷る」は引つ越す意味だが、神が引つ越すとはどういうことなのか。伊勢には神様が祀られている社殿が複数ある。主なものは天照大神あまてらすおほみかみが祀られている内宮ないぐうと豊受大神とようけおほみかみが祀られる外宮げぐう。それぞれの社殿が建っている土地には、まったく同じ規模の空地が隣接している。二〇年ごとにその空地に新しい社殿が建つ。建ったのちに神様は古くなった社殿から隣接する新しい社殿へと引つ越すのである。

■二一世紀の伊勢神宮

平成二五年のこの事業はなんと五七〇億円がかかり、また一四、〇〇〇本もの檜の木の伐採を必要とした。一

本目の木を倒してから新しい社殿ができるまで、また社殿内に飾る装束・神宝を職人が金、漆、絹をもって造るまで、さらに募金活動の開始から終了まで、およそ八年間もの歳月がかかる。諸儀礼のクライマックスは神様が実際に引越しを行う儀礼（伊勢では「遷御」という）そのものである。内宮の天照大神が引越す遷御儀礼は、平成二五年一〇月二日の夜に行われた。外宮の豊受大神の引越しは、同五日夜であった。

この年に伊勢を参拝した人びとの参拝動機はもちろんさまざまであるが、九〇〇万人という数だけでも伊勢神宮の重要性を理解できるだろう。二〇年前の式年遷御の年（平成五年（一九九三））の参拝者が五五〇万人だったのと比較すれば、その数は一層印象的である。なお、この式年遷宮に携わる必要経費のほとんどすべては国民の寄付金で賄った。伊勢神宮は二一世紀の日本人にとって極めて重要な聖地である。

聖地の重要性を一般の日本人との関係のみで測るなら、ほかには明治神宮のような近代になってできた聖地、伏見稲荷のように古代から存在する聖地など大勢の人びとを引きつける神社やお寺が多くある。伊勢はしかし日本の聖地のなかでも特に皇室との関係性が深いことを指摘しておく必要がある。これも平成二五年の式年遷宮全体を見ればよく分かる。

遷宮の諸儀礼は平成の今上天皇のいわば意思表示により平成一七年（二〇〇五）に開始された。そして一連の儀礼のうち主なものは平成二六年（二〇一四）に天皇と皇后の伊勢参拝をもって終了した。この間、天皇は毎年伊勢神宮にいくらか寄付金を下賜された。伊勢神宮の大宮司が数回天皇に拝謁して、遷宮について協議を行っている。遷御儀礼が行われた一〇月二日当日は、天皇は東京の皇居にいたが、遠くから天照大神を拜んだ。その行為を「遙拝」というが、天皇は天照大神をみずからの祖先として遙拝したのである。

平成二五年一〇月二日、内宮の遷御行列は興味深いものだった。大宮司を始めとする神職たちの他に臨時祭主の黒田清子（天皇の第二皇女）、そして第二皇子の秋篠宮が皇室の代表として参列していた。同じ遷御行列には他

にもモーニング姿の内閣総理大臣安倍晋三および麻生太郎など閣僚八人も加わっていた。安倍晋三は遷御行列に参列した戦後初の総理大臣である。唯一の前例は、戦前の昭和四年（一九二九）の遷御に浜口雄幸首相が参列したことである。このようにみれば二一世紀の日本国民、さらに皇室、そして政府との関係において伊勢神宮は極めて大切な聖地であることがわかる。伊勢の重要性を筆者がここでアピールするのは、一冊の本をなぜ伊勢神宮の歴史に捧げるのかを説明するためである。伊勢が重要な聖地であるだけにその歴史を我々がもつと知らなければいけない。

■聖地の不変性

いまひとつ冒頭で主張しておきたいことがある。それは伊勢神宮という聖地が常に変容する存在であるということだ。それは右に触れた首相の姿に端的に表れた。首相の参列は遷宮全体に、また神宮そのものにこれまでになかった、新しい国家的、公共的な性格を付与する効果をもたらした。二〇年前にはとても考えられなかった展開である。このようにして、戦後の伊勢神宮の位置づけは変容しつつあり、また戦後の神宮は法的に見ても戦前のそれと異なり、そしてまた戦前の神宮はたとえは国家、社会との関係においても江戸時代の神宮と大きく異なる。「異なる」と簡単にいつているが、それは伊勢神宮が各時代の政治的、経済的、社会的状況から影響を常に受けてきたということである。考えてみれば常識以外の何ものでもない。ただ、我々は伊勢神宮が変容する聖地だという「神宮像」は持っていない。それは、なぜだろう。

ひとつには伊勢神宮自身が発信する情報、あるいはそれを受けて大衆に情報を発信するメディアに由来すると思われる。戦後の神宮の広報などはたとえば伊勢神宮を「日本人の原点」や「日本人の心のふるさと」と位置づけてきた。いずれも根本的に「変わらないもの」というイメージである。神宮は「時が移り、時代の空気が変わ

つても永遠に変わることなく存在」する、という神宮に対する信奉がある。それをささげるものとして、式年遷宮という古代に遡る儀式が連綿とつづいてきたという史実がある。式年遷宮は「日本人が日本人である事を忘れないためのお祭り」で「再生をつづけることで生まれる永遠性」を有し、「永遠に若さを保ち続ける」装置である。そして遷宮は「永遠性を考える文明モデル」などと神宮の広報パンフレットなどに書かれている。ごく最近「常若」という表現が神宮の広報資料に見受けられるが、それもやはり二〇年ごとの式年遷宮によって伊勢神宮がつねに若い、いつも変わらない、という意味をつたえるものである。

伊勢という聖地が変わらない、原点であるという見方の裏には神話の存在も当然ある。八世紀の『日本書紀』などの神話によれば、伊勢神宮は神が神のために創った場である。神が創ったなら人間によって形成されたり、根本的に影響されたりすることはあり得ない、ということになる。では、伊勢神宮の創建にまつわる神話はどのようなものだったのかを確認したいが、神話の骨子は現在でもさまざまな広報資料、あるいは伊勢の徴古館という歴史博物館などで語り継がれていることに注意しておきたい。話は伝説的な存在である第一〇代天皇崇神の時代に遡る。

歴代天皇は宮殿内において祖先神の天照大神を祀っていた。ところがこの崇神天皇が即位してから六年たったところで疫病が天下に発生して、数多くの死者を出した。天皇はそれを天照大神の祟りと考え、その「勢い」を恐れるあまり、ともにすまうことに大変な不安を感じ、皇居から外へと遷したのである。この実に恐ろしい天照大神を豊鍬入姫命に委託し、大和国の笠縫邑というところに祀らせることとした。『日本書紀』は理由をいわないが、天照大神は次代天皇垂仁の世になってまたも動き出すことになった。天皇はこの神を今度は倭姫命に委託したが、倭姫命が諸国を回って伊勢国にたどり着くや、天照大神は、「ここは大和に近い、美しい国だ（「傍国可伶国」、この国にいたい）」と告げた。倭姫命はその意志を尊重し、五十鈴川のほとりに「斎宮」を創建した、

それを「磯宮」という、と神話にある。

以上は八世紀の『日本書紀』が語る内宮の創建神話だが、外宮にもおなじく天照大神の意志によって創建されたという物語はある。それは『日本書紀』にはなく、平安時代初年の『止由氣宮儀式帳』を待たなければならぬ。舞台は五世紀に実存した雄略天皇の時代だが、天照大神は天皇の夢に現れ、丹波国に祀られている等由氣大神を伊勢につれてきてほしい、この神が側にいるなら辛いことがなくなるし、食事に困ることはないだろう、と告げた。雄略天皇はしたがってその神を丹波から伊勢に遷すことに決めた。今日いうところの外宮が成立した経緯である。いずれにせよ、このような創建神話、つまり聖地が神の意志によって創られたという話は、聖地につきものである。洋の東西を問わず聖地は神が創り、神が定めた場であると語りつがれ、人間の時間と空間を超越した性格をもつとされている。

■変容する聖地をめぐる

いまひとつ指摘しておきたいことがある。それは学界における研究についてだ。我々は変容する聖地としての神宮像をいだいていないと先に述べたが、原因は学界にもある。つまり研究者はこれまでほうつり変わる、ダイナミックな神宮像を描いてこなかった。古代史の研究者は伊勢の古代を、中世史の研究者は伊勢の中世を、そして近世史の研究者は伊勢の近世をそれぞれの観点から論じてきた（近現代の伊勢についての研究にいたっては皆無に近い状態にある）。優れた研究業績が多くあることはもちろんである。しかし、時代（たとえば古代と中世、中世と近世など）をまたぐ研究は少なく、古代、中世、近世の伊勢がどのような社会的影響を受け、どのように変貌してきたのかといった視点からの研究はなかなか見当たらない。

この研究状況は伊勢だけの問題ではないし、また日本の学界だけにみられる欠点でもない。欧米等にもみられ

る問題である。聖地の研究は二〇世紀の前半から盛んになされているが、その研究にも時間軸が大いに欠けている。アメリカの宗教学者ジョン・コリガン氏は、聖地の研究を「時間軸につなぎ止める試み」がほとんど見受けられないと嘆く。「(聖地の) 先端的研究は空間のみの分析でなく時間の分析もますます必要とされるようになってきている」と主張したのはつい最近の二〇〇九年である [Corrigan 2009: 172]。オランダの宗教学者アイケ・ローツ氏は、一〇年程前から時間的な軸を設けた研究が徐々に現れつつあると指摘するが、聖地が社会的に、歴史的に創出され、また社会的環境によっても条件づけられる、という基本的な事実を認識した研究が極めて少ないことを慨嘆する [Rots 2013: 36]。要は、スミス (Smith 2004)、『トウイード』 [Tweed 2006]、『ローツ』 [Rots 2013] のごく一部の業績を除いて、聖地の歴史の変遷に着目した研究はいまだにない。

本書はまさにそのような、歴史に根ざした研究をめざすものである。伊勢神宮を、歴史を超越した不変の存在としてではなく、長い歴史のスパンをとってさまざまな転換期において多様な観点から伊勢神宮に焦点を絞り、その歴史的豊かさを明らかにすることこそ本書の狙いである。伊勢は政治的、経済的、社会的、宗教思想的な影響を常に受けてきたし、それらの影響によって形成され、再形成されてきた聖地だと、本書は主張する。本書はその目的をもって古代から中世、近世、近代を経て戦後までの時間軸を中心に設定し、伊勢神宮の移り変わる姿を捉えようとするものである。では、本書に収めた個別の論文が具体的にどのような議論を展開し、どのような神宮像を描いているのかを次に紹介しよう。

■伊勢の創建と古代的展開

現在の伊勢神宮では、先に触れた『日本書紀』の神話を字義通りに解釈して、神宮の創建過程について、崇神天皇の時代に始まり、垂仁天皇の時代に完成したという立場をとる。つまり、創建そのものを垂仁天皇の時代の

紀元前四年とする。考古学はこの説について何を教えてくれるのか。それは山中章氏が「考古学からみた伊勢神宮の起源——ヤマト王権の伊勢支配——」においてとりあげる課題である。山中氏は、弥生時代創建説を根拠のないものと退ける。大和王権が六世紀後半になって伊勢地方と深い関係を作ったことは事実だが、この段階でも伊勢神宮がまだ存在しないと山中氏はいう。氏はむしろ神宮の成立を壬申の乱（六七二年）と関連づけて議論する。壬申の乱の直前に大海人皇子が迹太川で天照大神を遙拝したこと、また乱直後に天皇が皇女を伊勢に派遣したことが『日本書紀』にみえるが、これこそ王権が伊勢に神宮を建てた始まりだとみる。

山中氏はこのような文献の記述に加え、考古学的成果をもって天武天皇の時代に創立を位置づけるが、ヘルマン・オームス氏は「伊勢に見え隠れする仏教 七六六〜七八〇」で同じ立場をとる。オームス氏は伊勢神宮を天武天皇、持統天皇があたりしく打ち立てた「儀礼国家」もしくは「宗教国家」の重大な構成要素とする。天武・持統両天皇は、権力とは儀礼と宗教の是認がなければ正統性を欠くものだと理解し、みずからの起源を太陽神にもとめ、そしてその神に関わる儀礼や神話を創出した、というのがオームス氏の主張である。

古代の儀礼国家には、変容する性格がある。その性格はたとえば八世紀になって仏教を包摂し、また伊勢において神宮寺をつくったことにもみえるという。小倉慈司氏は『延喜式』制以前の伊勢神宮——八〜九世紀の内宮と外宮をめぐって——で奈良・平安時代（八世紀から九世紀以降）の古代的伊勢神宮を考察するが、内宮と外宮そしてそのうえにたつた大神宮司の関係を論じる。伊勢の内宮と外宮は実は古代から近世をへて明治維新期まで敵対的な関係にあり、互いに何度も訴訟を起こし、ときには武力をもって戦いあうことさえあった。小倉氏はその長い、葛藤に満ちた関係史の始まりに焦点を絞り、神宮に頒下された公印というモノを方法として検討していく。印の分析が浮き彫りにしてくれるのは神宮全体を意味する内宮、その内宮に従属する外宮、そして内宮・外宮に対して徐々に台頭してくる大神宮司という、複雑な権力関係である。ここまで語られるのは平安時代まで

の状況である。

■中世——僧侶と神職の伊勢

ウィリアム・M・ボデイフォード、伊藤聡、D・マックス・モーマン、マーク・テーウエンの四氏は、鎌倉時代から室町時代にかけての中世を語る。これらの論考に共通する課題のひとつに、やはり伊勢神宮の仏教との親密で、しかも複雑な関係性がある。

ボデイフォード氏は「中世伊勢と仏教」において、鎌倉初期から室町末までを展望して伊勢と仏教の動揺する関係全体を視野に入れる。神宮の神職たちは老いてからは出家して、伊勢の神々のために法楽ほほらくを行い、領地を寺院に寄進する敬虔な仏教徒であったことを示す。他方、僧侶は伊勢の神々に守られているという自覚があったため、室町時代に従来の秩序が乱れ伊勢がそれまでの経済的基盤を失った際、僧侶が伊勢のために動き出す。一五世紀に式年遷宮の寄付金をつるため勘合貿易使節団を組織し、また一六世紀に式年遷宮を行った際には尼僧が勧進運動を行った。

伊藤聡氏は「夢告と観想——鎌倉時代における僧たちの伊勢参宮——」で伊勢を参拝する僧侶というまったく新しい鎌倉期の文化現象をとりあげ、僧侶のさまざまな動機を分析し、その主な動機は、僧侶が見る「夢」や僧侶が感得する真実かんそく（「観想」）にあったことを示す。平安時代までの伊勢神宮では仏教忌避があったが、「夢」と「観想」という戦略によって僧侶がそれをのりこえ、伊勢へと参拝しはじめるとダイナミックな現象が発生する。これは一二世紀からみられる現象だが、当時は僧侶参詣の禁がまだ存在していたために、僧侶は群参を憚って参拝するのは夜に限られた。いずれにせよ僧侶の伊勢参拝は神Ⅱ仏の一体性を体験する秘儀であった。

僧侶の伊勢に対する信仰および実践から、伊勢の神職による仏教信仰、仏教実践へと焦点を移行させるのは

モーマン氏の「地中の仏教——伊勢神宮の地下からの眺望——」だ。「完全に仏教徒のための場と化した」伊勢がその歴史の舞台だが、時代は末法思想まつぽうしきょうが支配的だった鎌倉期である。内宮の荒木田家あらかきだ・外宮の度会家の神職わたくらたちは仏教的救済を祈願して、經典などを地中に埋納する。これは浄土で生まれ変われることを願って行った儀礼的行為であった。鎌倉初期の一・二世紀にはたとえば伊勢の朝熊山あさまや小町塚で經典のほか曼荼羅まんだら等も埋納していた。神職は、つまり敬虔な仏教信者、仏教実践家であったことをモーマン氏は示す。

テーウエン氏も神職を考察の対象とする。「混沌の始めを守る——度会行忠の混沌論と徳政——」では、一三世紀に活躍した外宮禰宜ねぎの度会行忠が焦点となる。行忠が伊勢の言説に混沌（カオス）論を導入したことは伊勢を考える上で大きな画期をなすと論じる。混沌論は行忠が弘安一〇年（二二八七）に著した『神名秘書』において登場する。それは神道内部で独自に展開したものである。『神名秘書』の執筆動機は、伊勢神宮が蒙古襲来後におかれた危機的時代状況にあり、徳政の必要性を朝廷にアピールする戦略であったとテーウエン氏は力説する。

■伊勢の近世的展開——権力、思想、庶民

本書は西山克氏の論文「復活か創造か——天正一三年の神宮式年遷宮をめぐる——」をもって中世から近世へと議論の対象を移す。西山氏は豊臣秀吉のもとで行われた天正一三年（一五八五）の式年遷宮を探り、それを百数十年途絶えていた「復活」事業としてではなく、むしろ新たな「創造」としてみなすべきだとする。秀吉は新たな統一的な国家権力を創出するにあたり、天皇の伝統的権威とそれを意味づけた神話を必要とした。式年遷宮の実施こそ、その権威を把握するのに欠かせない戦略であった。西山氏は式年遷宮の長い断絶を過小評価して

はいけないと主張する。遷宮が断絶していたために神宮のあり方が忘却されてしまったというのだ。そのことを仄めかすものには、勸進聖かんにんのひりが描いたとされる伊勢参詣曼荼羅図などがある。そうした曼荼羅には、たとえば現実と大きく掛け離れた、朱塗りの瑞垣みずがきをめぐらされた妻入りの社殿等が描かれている。式年遷宮がこうして実施された後の江戸期の伊勢神宮を扱う論考は齋藤英喜氏の「読み替えられた伊勢神宮——出口延佳、本居宣長を中心——」と劉琳琳氏の「御蔭参りおかげまいにおけるお札降り現象——近世庶民の伊勢信仰の側面——」である。

齋藤氏は出口延佳および本居宣長の著述にみる神宮およびその祭神をめぐる言説の変遷に着目し、変貌している伊勢神宮の近世像の一端を示す。中世に新しく出来た神話——たとえば外宮の神がクニノトコタチおよびアメノミナカヌシと合体だとする説は近世的な展開をみせた。外宮神職の延佳は、たとえばあらゆる人間の心にアメノミナカヌシの「分身ノ神」が宿ると説き、人間は神なるものを宿す存在だと解釈する。江戸中期の国学者宣長は伊勢神話を新たな方向へと導いていく。それは特にアマテラスの位置づけに見受けられる。齋藤氏が示すように、宣長が『古事記伝』等で語る「天照大御神」は、古代神話のアマテラスではなく、西洋天文学を媒介として作り出された太陽神アマテラスなのであった。

劉琳琳氏は、江戸時代に見られるまったく新しい宗教現象をとりあげる。周期的に発生する大規模な集团的伊勢神宮参拝である御蔭参りや、その引き金となったお守りなどが空から降ってくるお札降りがそれだ。御蔭参りやお札降りという実に不思議な現象が起こるメカニズムには諸説あるが、劉氏が紹介した事例は極めて興味深い。たとえば蘭学者の平賀源内は、風にお札をつけて高い山に登り「風に任せて」村にまき散らしたことを告白しているが、それをみた村中の人びとは「神のみしわざ」だと信じ、伊勢へと出かけたという。お札降りにとまなうさまざまな実践は中世では考えられないダイナミックな庶民的現象であると劉氏は結論づける。

■伊勢神宮が歩んだ近現代史

さて近世から近代への転換期を扱うのは、河野訓氏の「伊勢における神仏分離」である。伊勢の多くの転換期を辿る上では明治維新は特に重要だと思われる。それはひとつには明治天皇が維新直後に伊勢を参拝したからに他ならない。天皇による史上初の伊勢参拝であって、天皇と神宮の間のこれまでにない新しい関係の始まりとなる。伊勢神宮はこれ以後、近代国家におけるもつとも聖なる場へと変貌していく。天皇の参拝を契機に数多くの改革が伊勢で実施されたが、そのなかで河野氏が論じる神仏分離——つまり伊勢を神道の空間と成し、そこから仏教を取扱う営み——の重要性はひときわ大きい。古代から存続してきた伊勢の仏教とのいわば公的關係は明治維新をもって幕を閉じた。伊勢で神仏を「分離」するというのは、寺院の破壊、堂塔の破却、僧侶の還俗そして神葬祭（＝神道的葬式）の導入をともなった。下中之地藏、常明寺門前町、妙見町など仏教風の地名も改称され、伊勢（宇治と山田）はほぼ一夜のうちに仏教のないまちと化してしまった。

谷口裕信氏の「神苑会の活動と明治の宇治山田」は、河野氏と同じ空間論的なアプローチをとり、民間団体の神苑会が宇治と山田に施した抜本的な変貌について語る。外宮と内宮それぞれの隣接地の浄化、新しい神苑の設置の他、外宮と内宮のあいだの倉田山の開発や歴史博物館、農業館の建設、さらに外宮と内宮を倉田山経由で結ぶ道路などは、神苑会の大いなる遺産である。神苑会の営みは常に困難にみまわれた。隣接地の家屋を取り払う時の住民の抵抗、募金活動の低迷、事業の度重なる遅延や縮小などがあつたが、今ある観光都市としての伊勢は神苑会の活動に負うところが大きいと谷口氏は結論づける。

明治から大正については、高木博志氏が「修学旅行と伊勢」で語る。考察の主な対象は、奈良女子高等師範学校が明治四四年（一九一〇）に行った伊勢への修学旅行である。奈良女高師の生徒は将来、地方の高等女学校などの教壇に立ち修学旅行を引率するということもあつて四年間に一〇回もの修学旅行を行ったが、伊勢の場合は

身体の鍛練と現地の実地研修と参拝とが一体となって行われる旅となった。神苑会が作った神苑、農業館、徴古館などを生徒たちが回り、引率教員から指導を受け、感想文を書き残した。この伊勢への修学旅行は大正期に定着し、昭和期の国体明徴運動（こくたいめいめいどうどう）を受けて一層盛んになっていくが、生徒たちにとっては楽しい旅という要素が常にあったことを高木氏は指摘する。

田浦雅徳氏は「昭和四年式年遷宮と伊勢」で昭和四年（一九二九）の遷宮の歴史的特徴を浮き彫りにする。その特徴とは、遷宮が明確に国家的、国民的大行事として取り組まれたことである。田浦氏は衆議院議員が内閣に提出した超党派の質問主意書から説き起こし、式年遷宮がこれまでにない規模の祝賀イベントとして国家のもとで計画されていく過程を分析する。内地・外地の学校での奉拝式、参列員・特別奉拝者の幅広さなどはいずれも前例をみなかった。この前例のない遷宮を経験した伊勢の人びとが従来の「神都」意識に加え、伊勢を「聖地」とみなすようになる。そして昭和初年に大神都聖地計画を構想するようになる。その構想は国家事業として実現へと向かっていくのであった。

戦後の観点を提示するのはジョン・ブリーンの「戦後の伊勢——プリント・メディアにみる神宮と式年遷宮——」である。ブリーンはプリント・メディア、つまり全国紙や神社界が刊行した広報資料を分析の対象とする。メディアには社会的現実を形成する働きがあるため、戦後の伊勢の現実を知る重大な手がかりとなる。伊勢神宮をめぐるメディアは、二〇年ごとの式年遷宮を契機に活発になるが、広報資料のモチーフや全国紙の論調が二〇年ごとに移り変わっていくことを示す。伊勢神宮もメディアの言説の影響を受けながらも変容していく。変容する方向性は、非私有化あるいは公共化というべきもので、プリント・メディアがその原動力の一つとなったことを指摘する。

補論「浮遊する記号としての「伊勢」——日本史における伊勢神宮の多重性と神道の絶えざる再コード化

——」は、ファビオ・ランベッリ氏がこのように古代から戦後にかけて諸方面から常に影響を受け、常に変遷する／させられる伊勢神宮をはたしてどう理解したらよいか、理論的（文化記号論的）に分析するものである。表題の浮遊する記号とは、それ自体意味はないが多重の象徴を表示するために何らかの意味を受け取る存在をいう。伊勢は、そのような存在で、時代状況などに左右され、意味づけられる形態の組み合わせだとする。しかし、時代によってはそうではない。ランベッリ氏は結論で、一定の意味を持つ、安定的な文化的単位として機能した時代もあったとして、伊勢から神道へ、神道から日本文化全体へと視野を広げていく。日本文化の美しさおよび強さは、まさに統一を拒否する多様性に満ちた、常にさまざまな可能性と代替性をはらむ領域にあると、大胆かつ挑発的にいう。

【参考文献】

- Corrigan, John 2009 "Spatiality and religion." *In The Spatial Turn: Interdisciplinary perspectives*, ed Barney Wharf and Santa Arias, Routledge.
- Rots, Alike 2013 *Forests of the Gods: Shinto, nature and sacred space in contemporary Japan*, University of Oslo.
- Smith, Jonathon Z. 2004 "The topography of the sacred." *In Relating religion: essays in the study of religion*, University of Chicago Press.
- Tweed, Thomas A. 2006 *Crossing and dwelling: a theory of religion*. Harvard University Press.

伊勢神宮の古代、中世、そして近世のさまざまな側面を明らかにする一流の研究はもちろんたくさんある。それは序章で述べた通りだが、伊勢神宮の歴史を十分に長いスパンで捉えた研究はなかなかない。さらに、神宮の変容する姿に特に注目して、そこに最大の意味を見出す研究は存在しない。神宮がもつとも激しく揺らいだ近現代をとってみても、研究がほとんどなされていない。その結果でもあるうが、我々の前に現れる伊勢神宮は、変容しない、時間と空間を超越した、神話的な存在となっている。日本で最も重要な聖地Ⅱ伊勢神宮に関する歴史的研究はまだまだ足りない、ということになる。

そうした状況に本書の編者が不満をいだき、考えたのが「国際シンポジウム 転換期の伊勢」であった。伊勢神宮の六二回目の式年遷宮（二〇二三年一〇月）直前の夏に国際日本文化研究センター（日文研）において国際シンポジウムを開き、神宮を長いスパンでとらえ、しかも多角的に学際的に議論しあう場を設けたいと考えた。とりわけ伊勢神宮の転換期に光をあて、神宮史のダイナミズムを浮き彫りにする狙いがあった。そして、シンポジウムの成果を、限られた数の学者だけのものとせず、一般の読者にも披露したいという希望を当初からもっていた。本書『変容する聖地 伊勢』は、その希望が結実したものである。

戦後の伊勢神宮は、遷宮の年にさまざまなメディアから脚光を浴び、参拝者の数が大きく伸びる。皇室も、国家も、みずからと神宮との関係をアピールする契機となり、神宮はいわゆる公共圏において一時的

ではあれ、支配的な存在となる。しかし、式年遷宮が終わってみると、参拜者がまた減り、神宮がもつ国民と皇室と国家との関係性は薄くなり、神宮が公共圏から退いていく。戦後はこうした周期的な現象が見て取れる。したがって、本来なら伊勢神宮が次に大きくクローズアップされるのは、第六三回の式年遷宮が行われる二〇三三年となるはずだ。しかし今回は事情が違う。まず、二〇一六年に第四二回先進国首脳会議が伊勢志摩で開催される。このいわゆる「伊勢志摩サミット」は伊勢にとつて重要な意味をもつ。G7各国の首脳と欧州連合の代表者が伊勢にやってくる。伊勢神宮そのものも、当然国内においてもまた海外からも新たな注目を浴び、神宮と日本文化との関係性が問いなおされるきっかけとなるからである。

伊勢神宮が注目される可能性があるのは、この伊勢志摩サミットだけではない。近い将来に日本国憲法が改正される可能性がある。この憲法改正は神宮、神宮のあり方、その公共性の問題と無関係なものでは決してない。自民党政権が改正の対象としているのは、いつも話題になっている戦争放棄の第九条だけではない。天皇のステータスと主権問題を規定する憲法の第一章も、国民の権利および義務をめぐる第三章、とりわけ信教の自由、国家の宗教との関係を規定する第二〇条（そして第七章の第八九条）も改正されていく見込みとする意見もある。二一世紀における日本国憲法の改正のよしあしを検討するにあたっては我々はやはり伊勢神宮の歴史、神宮の日本文化における位置づけを多角的に、学際的に正しく把握する必要がある。以上のような理由から、本書『変容する聖地 伊勢』に収めた数々の論考が、一石を投じ、読者の理解を深めるのに役立つことを心から願っている。

本書の基礎となった「国際シンポジウム 転換期の伊勢」について一言触れておきたい。「転換期の伊勢」は、たくさんの研究者に日文研に集まっていたたく貴重なきっかけとなった。伊勢の古代、中世、近世、近現代にみる転換期を、歴史学、文学、宗教学、哲学、建築学、社会学、政治学などの観点から議論

していただけたことはとても有意義であったと確信している。普段あまり交流の機会を持ってない研究者が交流し、お互いに多くの刺激を受けることができた。

ただし、本書はよりテーマを絞った書籍にするために、一部シンポジウムと構成を変えることにした。そのため、シンポジウムに大いに貢献したが、本書に収録できなかった発表もある。佛教大学教授の田山令史氏の「本居宣長の言語観——変容と持続——」は刺激的で、活発な議論の引き金となった。また、コメンテーターから貴重な発言を多くいただいたが、本書への掲載はできなかった。コメンテーターとして大いに活躍した先生方を列記することにし、感謝の意を表したいと思う。日文研名誉教授の末木文美士氏と京都大学名誉教授・秩父神社宮司の蘭田稔氏は、それぞれ古代、中世部門で、日文研教授の荒木浩氏と皇學館大学教授の白山芳太郎氏は、中世・近世部門で、近現代部門で提示してくださった。近世部門では、日文研の井上章一教授と笠谷和比古名誉教授が、そして近現代部門で静岡大学の M. G. Sheffall 教授と明治学院大学の原武史教授がそれぞれコメンテーターをつとめ、議論を盛り上げてくださった。米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校名誉教授のアラン・グラパール氏は二日分の発表、議論の総まとめを快く引き受けてくださった。司会を務めた、日文研准教授の榎本渉氏、フレデリック・クレインス氏、佐野真由子氏にもここでお礼を申し上げたい。

「転換期の伊勢」のような国際シンポジウムの段取りはなかなか大変だが、二〇一三年七月二六日と二七日当時のすべてが順調に行われたのは、日文研研究支援係の児島さなえ氏、また大学院生（当時）のアントン・セビリア氏、王莞晗氏、栄元氏、西田彰一氏その他の大学院生に負うところが極めて大きかった。英文で書かれた原稿の日本語訳のチェックは関西学院大学の新井菜穂子氏にお願いした。各氏にここで改めて感謝の意を表したい。本書の刊行にあたっては、思文閣出版の田中峰人氏に大変お世話になった。こ

の原稿を丹念にチェックしていただき、厚くお礼を申し上げます。

最後に、本書の出発点となった「国際シンポジウム 転換期の伊勢」、ブリーン論文「戦後の伊勢——プリント・メディアにみる神宮と式年遷宮——」は、JSPS科研費二四五二〇七九一の助成を受けたものである。

ジョン・ブリーン

吉田兼俱	88, 89, 133, 303, 304
吉田茂	260
吉田神社	89, 141, 303
吉田神道	304
吉見幸和	152
『読売新聞』	249, 250, 257, 279~83, 289, 291, 293
ら	
来光寺	177
り	
離壇	187
『両宮形文深釈』	96, 104
両宮庁	143
『両宮本誓理趣訶衍』	104
両部神道	110, 315
両部曼荼羅	125, 129
る	
『類聚神祇本源』	303

れ	
『麗気記』	303
連続性	301
ろ	
『老子河上公注』	125, 127~9
『老子述義』	125
『老子道德経』	125, 127, 129
わ	
渡辺洪基	214
度会氏	11, 83, 111, 112, 114, 116, 117, 119, 196, 303
度会家行	303
度会神道	110, 303
度会常行	117
度会雅彦	113
度会行忠	11, 83, 123
『和名抄』	154

ひ	
常陸宮正仁親王	282
平賀源内	12, 176, 179
平田篤胤	316
ふ	
複正	193, 199, 201
福地由廉	272, 273
藤原氏	37
藤原武智麻呂	38
二見浦	213, 237, 244, 246
仏教忌避	10, 92, 93
復古神道	77
普遍性	159, 164, 165, 167
へ	
平安京奠都千百年紀年祭	220
『平家物語』	81
弁暁	94
ほ	
宝珠	96, 97, 104
蓬萊尚賢	160
法楽	10, 84, 94, 124, 253
法楽寺	85, 124
法楽舎	85, 87, 88, 124, 189~91, 193, 194
本地垂迹	125, 128
『梵網經』	83
ま	
『毎日グラフ』	283
『毎日新聞』	279~83, 289, 291, 293
松木貴彦	143, 144, 146
松坂・松阪	159, 174, 177, 244, 247
末法(思想)	11, 111, 113, 117
万覚寺	118
曼荼羅	102, 104, 105, 110, 111, 132
『万葉集』	154
み	
御巫清直	196, 197
御厨・御菌	123
御饌津神	151, 161~3
宮川	26~9, 33, 124, 127, 141, 208, 211, 268

宮川電気株式会社(伊勢電気鉄道株式会社)	225, 232
『宮川日記』	173
『宮川夜話草』	270
御幸道路(御成街道)	208, 222, 233, 225, 228, 230~2, 234
明王院	190
妙楽寺	88
む	
夢告	10, 92
無住一円	109
め	
明治天皇	197~9, 201, 205, 228, 230, 231
メディアア	5, 14, 276
も	
望月圭介	259, 260
本居宣長	12, 150, 247, 248, 305, 311
森壺仙	174, 175
文徳天皇	80
文武天皇	43, 110
や	
山口昌男	297, 307, 316
山崎直胤	214
山田顕義	214
『大和葛城宝山記』	104
倭姫命	6, 26, 245, 303
倭姫宮	222
『倭姫命世紀』	127, 153
ゆ	
唯一神道	133
(唯一)神明造	137, 139, 140, 147, 148, 245
雄略天皇	7, 155
よ	
遙拝	4, 9, 102, 259, 262, 281~3, 291
『陽復記』	155~7
吉井友実	214
『吉岡家記録』	178
芳川顕正	214
吉田兼有	141

つ	
通海	84
『通海参詣記』	84, 98, 101, 102
ツアーリズム	249
月読宮	246
て	
帝国博物館	220
出口延佳	12, 150
鉄道	240, 244, 261, 267
『天照大神儀軌』	103, 104
『天地靈覚秘書』	128~32
天武天皇	9, 37, 41, 44, 301
天龍寺	88
と	
『東海道中膝栗毛』	150, 151, 156
等観寺	270
道鏡	46, 47, 50
『東京朝日新聞』	257, 260, 266, 268
東京師範学校	240
東京女子高等師範学校	248, 249
東大寺	60, 67, 94, 96, 97, 98, 105, 118, 124, 238
『東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記』	94, 98, 101
『東大寺真言院再興略記』	99
『東大寺造立供養記』	95
『東大寺統要録』	99
『東大寺要録』	93
多武峰	88
東福寺	125, 130
迹太川	9, 32
徳川家康	147
徳政	11, 123
独立棟持柱建物	20~2
祈年祭	44
飛神明	182
『止由気宮儀式帳』	7, 55, 67, 69, 151
『豊受太神宮禰宜補任次第』	65
豊受大神(トヨウケ)	3, 7, 151, 156, 161~4, 167, 168, 245
『豊受皇太神御鎮座本紀』	155
豊鍬入姫命	6, 302

豊臣秀吉	11, 140, 141, 143, 145, 147, 148, 191, 194
豊宮崎文庫	152, 229
な	
内国勸業博覧会	220, 224
内侍所	124
中臣氏	37, 38
中臣清麻呂	48, 50
『中臣祓瑞穂鈔』	157
『中臣祓訓解』	104
奈良女子高等師範学校	13, 240, 241, 248, 249
成川尚義	219
に	
日露戦争	221, 228, 247
ニニギ	43, 45, 161
『日本書紀』	6~8, 42, 43, 45, 127, 128, 130, 151, 154, 155, 303, 306, 314
ぬ	
抜け参り	175, 181, 182
ね	
禰宜	56, 60~5, 68, 69, 71, 83, 84, 90, 99~101, 113, 116, 129, 131, 143, 145~8, 151, 256, 270, 282
禰宜庁	123, 124, 133
の	
農業館	13, 14, 219~21, 223, 225, 230, 233, 243, 245, 254
は	
廃仏毀釈	195
八幡神	47, 50
花房義質	214, 219, 220
浜口雄幸	5, 265, 292, 293
早懸	201~3
林崎文庫	160
林羅山	152
パワー・スポット	292
『万歳書留控』	180

神道五部書	132, 153, 155, 156, 158
神道指令	276, 278
『神都雜事記』	194
『神都名勝誌』	20, 271
『神皇正統記』	83
心御柱	104, 313
『真福寺本古事記』	154
神仏習合	49, 93, 139, 304
神仏分離	13, 187
神仏分離令	108, 188, 191, 193, 195, 196, 204
神宝	278
『神法楽観解深法卷下』	104
神明社	178
神明造	20~2
『神名秘書』	11
神領	96, 123, 130~3, 187, 199~202, 204, 208, 211, 264, 265, 270
神領興行法	126
『神領葬祭略式』	201
神領民	187, 197, 201, 202, 204, 205
す	
垂加神道	159
垂仁天皇	6, 8, 303
スサノヲ	162
崇神天皇	6, 302
せ	
政教分離	276, 293, 300
正寿院	200
清順(慶光院)	89, 90, 253
清浄	49, 83, 132, 158, 310, 311
成尊	93
聖地	3~5, 7, 14, 38, 92, 94, 234, 249, 270, 274, 283, 300, 302, 304
正統性	50
『勢陽五鈴遺響』	189
西洋天文学	12
清和天皇	80, 81
世義寺	189, 196
遷御	4, 5, 148, 207, 252, 256, 259, 261, 263, 265, 268, 279~83, 289~93
遷宮	5, 51, 198
『先代旧事本紀』	45, 154

そ

『造伊勢二所太神宮宝基本記』	158
創世神話	42
副島種臣	214
即位灌頂	51, 303
存在論	307

た

醍醐寺	85, 124
『第五十九回神宮式年御遷宮の栞』	277~9, 287
『第五十九回神宮式年遷宮要解』	279, 285, 287
大嘗祭	48, 51
大正天皇	230, 231, 255, 257
大神宮司	9, 55, 57, 59, 61~4, 66, 68, 69, 71, 72, 123
『太神宮諸雜事記』	57, 60, 61, 64, 65, 93
『太神宮神道或問』	157
大神都聖地計画	272
大日如来	93, 105
待賓館	213
大福寺	85
『太陽』	285, 287
高倉山古墳	27, 28, 33
鷹司兼平	127, 131, 132
高御産巢日神(タカミムスヒ)	45, 302
多氣大神宮寺	110
託宣	93, 158
多田義俊	173
橘成近	154
橘諸兄	93, 96
田中義一	260
田中芳男	219
谷重遠	152

ち

知恩院	198, 199
中世神道	155, 162
中世神話	155, 156, 162
重源	94, 96, 97, 98, 101, 105
徴古館	6, 14, 213, 219~23, 230, 231, 233, 243, 246, 254

牛頭天王 192
 御遷宮奉祝神都博覧会 272
 後醍醐天皇 245
 古代神話 12
 国家宗教 45~7
 国家神道 39, 182, 283, 301
 後土御門天皇 89, 303
 小町塚経塚 11, 112, 116
 金剛證寺 113
 『金光明經』 78~80
 混沌論 11, 123

さ

斎王(制度) 32, 37, 51, 123
 『西行物語』 102
 斎宮 6, 31~3, 66, 110
 斎宮寮 66, 123
 西迎 98, 99
 西大寺 124
 最澄 82
 阪本廣太郎 258
 (伊勢)参宮・参拝 4, 10, 12~4, 86, 89, 92,
 148, 150, 155, 160, 168, 170, 173, 175~82,
 187, 207, 229~31, 238~41, 243, 248~50,
 253, 257, 260, 266, 268, 282, 290, 291, 293,
 300
 参宮急行電鉄 238
 参宮自動車 232
 参宮鉄道(参宮線) 225, 243, 244, 247
 『参詣物語』 101
 『三五歴紀』 127
 三種神器 303
 『三方会合記録』 188

し

式年遷宮 3, 4, 6, 10~12, 14, 87, 137, 205,
 207, 221, 233, 234, 237, 252, 276, 301, 307,
 309, 310
 重野泰繹 214
 持続性 297, 298, 301
 持統天皇 9, 37, 43, 44, 253, 301, 302
 渋沢栄一 214
 下賀茂神社 153
 寂照寺 199, 200
 『积日本紀』 130

『沙石集』 83, 84, 102, 109
 修学旅行 13, 237
 十七日会 208
 寿岩院 199
 周養 89, 90, 146
 貞慶 98
 聖守 98, 100
 正遷宮 89, 132, 141, 143, 145, 146, 147, 221
 定泉寺 116
 称徳天皇 41, 45, 46, 48~50
 聖福寺 88
 常明寺 196
 聖武天皇 47, 80, 93, 96
 昭和天皇 255, 257, 277, 291
 『続日本紀』 47, 55, 66, 68, 110
 『続日本後紀』 69
 神苑会 13, 14, 207, 254
 『神苑会史料』 208
 神器 43, 44
 『神宮』 288, 289
 神宮関係特別都市計画 234
 神宮司庁
 221, 224, 234, 262, 277, 279, 285, 292
 『神宮雜例集』 57, 61, 63
 神宮大麻 286, 287
 『神宮 第六十一回神宮式年遷宮をひかえ
 て』 287
 神宮撒下御物拝観所
 223, 224, 228, 230, 233, 243, 246
 『神宮秘伝問答』 159
 神宮文庫 201, 223
 神宮奉頌歌 261~3
 神郡 56, 57, 66, 72, 133
 『真言付法纂要抄』 93
 神社本庁
 108, 277, 286, 287, 299, 300, 303, 310
 壬申の乱 9, 31, 32, 34
 真盛 84, 86
 『新撰姓氏録』 154
 神葬祭 13, 193, 202~4
 神都 187, 198, 205, 220, 233, 234, 254, 270,
 274, 281
 神道 11, 14, 15, 39, 41, 42, 48, 49, 77, 78,
 90, 125, 130, 141, 152, 178, 197, 203, 205,
 297

大海人皇子	9, 32
大岩芳逸	208
大鹿ミヤケ	31
正親町天皇	145
大来皇女	32, 34, 37
『大阪朝日新聞』	267
太田小三郎	208, 214, 234
大中臣氏	83, 111, 112, 117, 119, 123, 130
大中臣真継	69
大神神社	43, 44, 304
御蔭参り	155, 170
『御蔭参話の種』	176
『御蔭参文政神異記』	177
『おかけまうての日記』	174
沖ノ島	25
御祓	171~9, 182
おほらい町	190, 193, 194
お札降り	170
御師	151, 155, 160, 171~3, 187, 190, 205, 207

か

貝原益軒	152
香川敬三	214
笠縫邑	6, 302
檀原神宮	238
鹿島則文	210, 214
風宮	98
『兼見卿記』	141
亀山天皇	85
画紋帯神獸鏡	19, 24~6
仮殿	143
仮殿遷宮	127
勘合貿易	10, 88
勧進	10, 253
勧進比丘尼	113, 114
勧進聖	12, 82, 94, 98, 137, 138
観想	10, 92
寛文の大火	188, 189

き

『菊屋町旧記』	173
記号論	15, 298, 308, 313, 315, 316
岸本康通	271
北畠親房	83

脚付短頸壺	29~31
経ヶ峰経塚	112, 113, 117
行基	46, 96
儀礼国家	43
近畿日本鉄道(近鉄)	272, 286
今上天皇	4, 291
近世神道	157
近世神話	151, 159, 161, 162, 165, 167

く

空海	82, 99
草壁皇子	43
国常立尊(ケニノトコタチ)	12, 127, 150, 151, 156, 162, 304
久邇宮多嘉王	256
倉田山	13, 210, 212, 213, 221~5, 230, 232 ~4, 243, 248

け

慶光院	190, 191, 194, 195
『溪嵐拾葉集』	304
源慶	100
『元亨釈書』	82, 83
賢俊	51
『元禄宝永珍話』	174

こ

皇學館大学(神宮皇學館)	223, 231, 311
孝謙天皇 → 称徳天皇	
高僧伝	82
『皇代記』	64
『皇太神宮儀式帳』	55~7, 69, 158
『皇太神宮禰宜譜図帳』	63, 64
後宇多天皇	191
『鼈頭古事記』	153, 154
合同電気会社	243, 246
国体明徴運動	14, 249
『古今著聞集』	98
御齋会	80
『古事記』	42, 43, 45, 153~6, 161, 162, 164, 165, 167, 168, 305, 306, 311, 314
『古事記裏書』	130
『古事記伝』	12, 155, 161~3, 165
護持僧	124
後白河院	94, 101

索引

- * 1 : 読み・表記が複数ある語については適宜一方にまとめた。
 * 2 : 章・節の表題に含まれる語は、その章・節内の初出頁のみを掲げ、太字にした。

あ	
秋篠宮	4
『朝日新聞』	279, 280, 282, 283, 289~91, 293, 294
朝熊山	11, 112, 113, 115
『吾妻鏡』	98
安倍晋三	5, 265, 292, 293
『天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記』	156
『天照坐二所皇大神正殿観』	104
天照大神(アマテラス)	3, 4, 6, 7, 9, 12, 19, 32, 34, 37, 44, 50, 68, 80, 86, 93, 96, 100, 102, 105, 110, 111, 124, 145, 147, 151, 155, 158, 161~3, 165~8, 247, 252, 253, 279, 280, 284, 286, 287, 289, 299, 300, 302~7, 309, 313, 314
天児屋命	304
アメノオシホミミ	43
アメノミナカヌシ	12, 156, 158
荒木田氏	11, 83, 111, 112, 116, 117, 119
荒木田時盛	116
荒木田延平	84
荒祭宮	20, 100
有栖川宮熾仁親王	214
い	
石井邦猷	210
五十鈴川	6, 28, 29, 190, 191, 212, 229, 237, 247, 273, 280, 281, 283
出雲大社	22
『出雲国風土記』	154
イセコッコ	289
『伊勢參宮名所図会』	191
伊勢參詣曼荼羅	12, 113, 137~41, 143
伊勢曼荼羅図(正暦寺本)	101, 139, 143
『伊勢路見取絵図』	194
『伊勢神宮式年遷宮の本義』	284, 287
伊勢神宮式年遷宮奉賛会	277, 281, 284, 286, 291
『伊勢新聞』	229, 232, 234, 256, 257, 260, 266, 267, 270~2
伊勢神領興行法	132, 133
伊勢神道	151~3, 156, 160, 298
『伊勢大神宮記』	95
『伊勢太神宮參詣記』	101
『伊勢二宮さき竹の弁』	159, 305
『伊勢二所太神宮神名秘書』	126~8, 131~3
伊勢国計会帳	68
『いせ参御蔭之日記』	174
磯神社	26
磯宮	7
磯部氏	117, 119
伊藤仁斎	152
う	
『浮世の有様』	175, 179
宇佐八幡宮	131
宇治山田都市計画	270, 271, 274
卜部兼方	130
卜部兼文	129
卜部氏	130
え	
叡尊	100
『淮南子』	127
恵亮	80, 81
『延喜式』	9, 50, 55
『延喜式祝詞』	154
『圓悟心要』	130
お	
逢鹿瀬寺	38, 49, 110

谷口裕信（たにぐち・ひろのぶ）

1975年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。皇學館大学文学部准教授。

「近代の伊勢参宮と宇治山田の旅館業」（『明治聖徳記念学会紀要』50, 2013年）, 「田中正造日記」（千葉功編『日記に読む近代日本』2, 吉川弘文館, 2012年）, 『伊勢市史』第4巻近代編（2012年）。

高木博志（たかぎ・ひろし）

1959年生。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学人文科学研究所教授。

『陵墓と文化財の近代』（山川出版社, 2010年）, 『近代天皇制と古都』（岩波書店, 2006年）, 『近代天皇制の文化史的研究——天皇就任儀礼・年中行事・文化財』（校倉書房, 1997年）。

田浦雅徳（たうら・まさのり）

1953年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程日本史学専攻。皇學館大学文学部教授。

「遷宮と昭和の宇治山田」（『伊勢の神宮と式年遷宮』皇學館大学出版部, 2012年）, 『伊勢市史』第4巻近代編（伊勢市, 2012年, 昭和戦前期の政治分野担当）, 「満州国における治外法権撤廃問題」（『植民地帝国日本の法的展開』信山社出版, 2004年）。

Fabio Rambelli（ファビオ・ランベッリ）

1963年生。ナポリ大学およびヴェネツィア大学共同大学院東アジア研究科博士号取得。カリフォルニア大学サンタバーバラ校宗教学部教授。

A Buddhist Theory of Semiotics (London and New York: Bloomsbury, 2013), *Buddhism and Iconoclasm in East Asia: A History* (with Eric Reinders, London and New York: Bloomsbury, 2012), *Buddhist Materiality: A Cultural History of Objects in Japanese Buddhism* (Stanford, Ca.: Stanford University Press, 2007).

D. Max Moerman (D・マックス・モーマン)

1963年生。スタンフォード大学大学院東アジア宗教学研究科博士号取得。コロンビア大学バーナードカレッジ、アジア文化学科教授。

The Japanese Buddhist World Map: Religious Vision and the Cartographic Imagination (Honolulu: University of Hawai'i Press, 近刊), *Localizing Paradise: Kumano Pilgrimage and the Religious Landscape of Premodern Japan* (Cambridge: Harvard University Asia Center, 2005), "Demonology and Eroticism: Islands of Women in the Japanese Buddhist Imagination." (*Japanese Journal of Religious Studies* 36/2, 2009).

Mark Teeuwen (マーク・テーウェン)

1966年生。ライデン大学日本学学科博士号取得。オスロ大学文化研究・東洋語学部教授。

A New History of Shinto with John Breen, Wiley-Blackwell, 2010), "The Laōzī and the emergence of Shintō at Ise," (in Jeffrey L. Richey, ed., *Daoism in Japan: Chinese traditions and their influence on Japanese religious culture*, Routledge, 2015), 「神祇、神道(じんどう)、そして神道(しんとう)——神道の概念史を探る——」(『文学』9-2, 2008年)。

西山 克 (にしやま・まさる)

1951年生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得(日本史学専攻)。関西学院大学文学部教授。

『聖地の想像力——参詣曼荼羅を読む——』(法藏館, 1998年), 『道者と地下人——中世末期の伊勢——』(吉川弘文館, 1987年), 『室町時代宮廷社会の精神史——精神障害と怪異』(東アジア権異学会編『怪異学の可能性』角川書店, 2009年)。

斎藤 英喜 (さいとう・ひでき)

1955年生。日本大学文学研究科博士課程満期退学。佛教大学歴史学部教授。

『異貌の古事記——あたらしい神話が生まれるとき——』(青土社, 2014年), 『陰陽師たちの日本史』(角川選書, 2014年), 『古事記はいかに読まれてきたか——〈神話〉の変貌——』(吉川弘文館, 2012年)。

劉 琳琳 (リュウ・リンリン)

1973年生。北京大学歴史学系世界史学科博士課程修了(日本史専攻)。北京大学外国語学院日本語学部准教授。

『日本江戸時代庶民伊勢信仰研究』(世界知識出版社(中国), 2009年), 「日本近世関於伊勢外宮地位の論争」(『日本問題研究』2014年第4号), 「日本古代到中世の天皇世系話語」(『社会科学』2012年第11号)。

河野 訓 (かわの・さとし)

1957年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程中退。博士(文学)。皇學館大学副学長。

『中国の仏教 受容とその展開』(皇學館大学出版部, 2008年), 『漢訳仏伝研究』(皇學館大学出版部, 2007年), 『初期漢訳仏典の研究』(皇學館大学出版部, 2006年)。

執筆者紹介（収録順）

John Breen（ジョン・ブリーン）

1956年生。ケンブリッジ大学日本学科博士号取得。国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授。

『神都物語——伊勢神宮の近現代史』（吉川弘文館、2015年）、『儀礼と権力——天皇の明治維新』（平凡社、2011年）、『近代外交体制の創出と天皇』（荒野泰典他編『日本の対外関係7 近代化する日本』吉川弘文館、2012年）。

山中 章（やまなか・あきら）

1948年生。広島大学文学部史学科考古学専攻卒業。三重大学名誉教授。

『長岡京研究序説』（塙書房、2001年）、『日本古代都城の研究』（柏書房、1997年）。

Herman Ooms（ヘルマン・オームス）

1937年生。シカゴ大学日本歴史学部博士号取得。カリフォルニア大学ロサンゼルス校歴史学部名誉教授。

Imperial Politics and Symbolics in Ancient Japan: The Tenmu Dynasty: 650-800 (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2009), 『徳川ビレッジ——近世村落における階級・身分・権力・法』（ペリかん社、2008年）、『徳川イデオロギー』（ペリかん社、1990年）。

小倉 慈司（おぐら・しげじ）

1967年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程単位修得退学。国立歴史民俗博物館准教授。

『天皇の歴史09 天皇と宗教』（共著、講談社、2011年）、『純神道大系 朝儀祭祀編 一代要記』1～3（共著、神道大系編纂会、2005～2006年）。

William M. Bodiford（ウィリアム・M・ボディフォード）

1955年生。イェール大学宗教学部博士号取得。カリフォルニア大学ロサンゼルス校宗教学部教授。

Going Forth: Visions of Buddhist Vinaya ((ed.), Honolulu: University of Hawai'i Press, 2005), *Sōtō Zen in Medieval Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1993), "The Medieval Period: Eleventh to Sixteenth Centuries." (in Paul L. Swanson and Clark Chilson, ed., *Nanzan Guide to Japanese Religions*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2006).

伊藤 聡（いとう・さとし）

1961年生。早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学。博士(文学)。茨城大学人文学部教授。

『神道とは何か——神と仏の日本史——』（中公新書、2012年）、『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館、2011年）、『中世神話と神祇・神道世界』（編著、竹林舎、2011年）。

へんよう せいち いせ
変容する聖地 伊勢

2016(平成28)年5月27日発行

定価：本体2,800円(税別)

編者 ジョン・グリーン

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

装幀 小林 元

印刷
製本 亜細亜印刷株式会社